第11回　是川縄文の里俳句大会　入選作品

【一般の部】

小泉靜子・選

天位　縄文の森をぬけゆく蝉しぐれ　八戸市　及川明子
地位　縄文の里は盆地や柿熟るる　八戸市　石垣浩造
人位　土器片はいまだ眠りて去年今年　八戸市　黒田長子
秀逸　朱の櫛の深きに眠る日の盛り　松本市　矢口恵子
佳作　土坑墓の赤は魔除けや蚯蚓鳴く　別府市　吉田紫紅
雪原に滲む白屋根縄文館　八戸市　阿保明子
まろやかな背を持つ土偶夜半の春　八戸市　磯沼チヨ
秋蝶の迷ひ草むす縄文碑　八戸市　畑崎義則
冬晴れや土偶やさしき影伸ばす　水米町　羽柴清志
古代より今に繋がる秋の空　八戸市　久信田史夫
是川の土器に宿りし秋の月　奈良市　浦城亮祐
遺跡よりの橡の実数多干されをり　八戸市　中村静江
大桜開きさふなる土偶の目　川越市　大室直紀

郡川宏一・選

天位　春ゆくと土偶は膝を抱きかかえ　長浜市　野口成人
地位　門火焚く土偶に似たる母の顔　安八町　穂苅真泉
人位　曼珠沙華火を畏れよと火焔土器　八戸市　新井山雅行
秀逸　頬杖の土偶に秋思深まれり　八戸市　鈴木莉花
発掘に勤しむひとへ若葉風　蒲郡市　石田賢吾
佳作　土坑墓の赤は魔除けや蚯蚓鳴く　別府市　吉田紫紅
畑打や縄文人も父も吾も　北九州市　佐藤節美
まろやかな背を持つ土偶夜半の春　八戸市　磯沼チヨ
縄文の丘のかたちに雪しんしん　鶴田町　竹浪誠也
風薫る縄文人の髪飾り　松本市　矢口恵子
多彩なる土偶の貌や秋うらら　階上町　岩村多加雄
秋うらら古代の跡は川に沿う　札幌市　東祐美
縄文の里は盆地や柿熟るる　八戸市　石垣浩造

佐藤幸子・選

天位　縄文の土器にほんのりましら酒　越谷市　小田和夫
地位　土坑墓の赤は魔除けや蚯蚓鳴く　別府市　吉田紫紅
人位　蟷螂よ土偶のやうな顔をして　盛岡市　西野友佳子
秀逸　乾栗を舐り縄文人となり　八戸市　田中たつを
冬ぬくし尖底土器に煤のいろ　八戸市　鈴木莉花
佳作　川の字に眠る竪穴虫集く　安八町　穂苅真泉
縄文の衣苧白露かな　八戸市　林野榮
土器片はいまだ眠りて去年今年　八戸市　黒田長子
朱漆や闇に浮かびて秋深し　八戸市　田村拡己
是川に舞ひ縄文の蝶となる　鶴田町　竹浪誠也
朱の櫛の深きに眠る日の盛り　松本市　矢口恵子
風光る縄文の朱の耳飾り　青森市　加藤健一郎
遺跡よりの橡の実数多干されをり　八戸市　中村静江

鈴木志美恵・選

天位　土坑墓の赤は魔除けや蚯蚓鳴く　別府市
地位　縄文の丘のかたちに雪しんしん　鶴田町
人位　国宝の土偶終戦日の祈り　大津市
秀逸　栃の実をふめば弥生の声きこゆ　八戸市
佳作　蟷螂よ土偶のやうな顔をして　盛岡市
　　畑打や縄文人も父も吾も　北九州市
　　縄文の郷の稔田神々し　八戸市
　　貝塚を嗅ぎて隼降り来たる　文京区
　　冬晴れや土偶やさしき影伸ばす　水戸市
　　是川に舞ひ縄文の蝶となる　鶴田町
　　秋日射す土偶の黙の語りたる　八戸市
　　縄文の土器にほんのりましら酒　越谷市
　　土器片はいまだ眠りて去年今年　八戸市

山谷文子・選

天位　冬晴れや土偶やさしき影伸ばす　水戸市
地位　薔薇の香や祈る土偶の微笑みて　八戸市
人位　秋澄めり土偶の貌の語り口　八戸市
秀逸　頬杖の土偶に秋思深まれり　八戸市
　　風薫る縄文人の髪飾り　松本市
　　秋天を仰ぐ土偶の清々し　川越市
　　国宝の土偶終戦日の祈り　大津市
　　蝉時雨遺跡めぐりて一日過ぐ　六戸町
佳作　古代より今に繋がる秋の空　軽米町
　　指跡の残る土偶やけふの月　八戸市
　　幾千年祈る土偶や星流る　八戸市
　　秋灯し土偶ほほえむ展示室　十和田市
　　やまあいに遺跡の里や秋の川　八戸市

吉田千嘉子・選

天位　まろやかな背を持つ土偶夜半の春　八戸市
地位　雪解風ここにも土偶をりぬとぞ　文京区
人位　春ゆくと土偶は膝を抱きかかえ　長浜市
秀逸　指跡の残る土偶やけふの月　八戸市
　　縄文の丘のかたちに雪しんしん　鶴田町
　　冬ぬくし尖底土器に煤のいろ　八戸市
　　曼珠沙華火を畏れよと火焔土器　八戸市
　　土坑墓の赤は魔除けや蚯蚓鳴く　別府市
　　是川に舞ひ縄文の蝶となる　鶴田町
　　縄文の土器に焦げ跡櫟の実　越谷市
　　田仕舞の遺跡の里をけぶらせて　八戸市
　　蝉時雨遺跡めぐりて一日過ぐ　六戸町
　　縄文の里は盆地や柿熟るる　八戸市

久信田史夫　磯沼チヨ
尾崎せえ子　遠藤玲奈
及川明子　野口成人
鈴木莉花　野月邦子
矢口恵子　竹浪誠也
大室宏美　鈴木莉花
近江董花　新井山雅行
新田道子　吉田紫紅
羽柴清志　竹浪誠也
野月邦子　小田和夫
村本正彦　黒田長子
宮内香宝　新田道子
松田薫　石垣浩造